

◆子宮頸がん予防ワクチン（不活化ワクチン）

◇子宮頸がんとはトパピローマウイルスについて

子宮がんは、子宮頸部にできる「子宮頸がん」と子宮の奥の子宮体部にできる「子宮体がん」に分けられます。ワクチン接種で予防できるがんは子宮頸がんの一部です。

子宮頸がんは、子宮の入り口にできるがんで、発がん性のヒトパピローマウイルス(HPV)というウイルスの持続的な感染が原因となって発症します。このウイルスに感染すること自体は決して特別なことではなく、性交体験がある女性であれば誰でも感染する可能性があります。子宮頸がんは近年 20 代や 30 代の若年層で増加傾向にあります。

HPV に感染してもほとんどの場合、ウイルスは自然に排除されてしまいますが、ウイルスが排除されずに長期間感染が続く場合があり、ごく一部のケースで数年～十数年かけて前がん病変（がんになる前の異常な細胞）の状態を経て子宮頸がんを発症します。無症状で経過するため早期に発見するためには、がん検診を受けることが大切です。

◇ワクチンの種類と接種回数 { 定められた接種間隔をすぎると定期接種と認められない可能性があります。
定められた接種間隔を守り、正しく接種しましょう！

ワクチンの種類	標準的な接種間隔
● 2 価ワクチン（サーバリックス） 子宮頸がん患者から最も多く検出される HPV16 型・18 型に対する抗原を含んでいます。	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 1 回目 2 回目 3 回目 </div> <p style="text-align: center;">1 ヶ月 6 ヶ月</p>
● 4 価ワクチン（ガーダシル） 16 型・18 型に加えて尖圭コンジローマの原因となる 6 型・11 型の 4 つの型に対する抗原を含んでいます。	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 1 回目 2 回目 3 回目 </div> <p style="text-align: center;">2 ヶ月 6 ヶ月</p>



※安全性・有効性のデータがないため、必ず同じ種類のワクチンを 3 回接種して下さい。

十分な予防効果を得るためには 3 回の接種が必要です。

※接種後に迷走神経反射として失神が現れることがあります。接種後移動の際は、腕を持つなどして付添い、接種後 30 分は座らせ立ち上がらないように指導してください。

◇主な副反応と頻度

頻度	HPV 2 価ワクチン	HPV 4 価ワクチン
10%以上	注射部位のかゆみ・痛み・発赤腫脹、胃腸症状（吐き気、嘔吐、下痢、腹痛など、筋肉の痛み、頭痛、倦怠感	注射部位の痛み・紅斑・腫脹
1～10%未満	発疹、じんましん、注射部位のしこり、めまい、発熱、上気道炎	発熱、注射部位のそう痒感、出血・不快感、頭痛
0.1～1%未満	注射部位のピリピリ感、ムズムズ感	注射部位の硬結、四肢痛、筋骨格硬直、下痢、腹痛、白血球数増加
頻度不明	失神、血管迷走神経発作（息苦しい、息切れ、動悸、気を失うなど）	疲労、無力感、悪寒、疲労、倦怠感、注射部位の血腫、失神、めまい、嘔吐、悪心、リンパ節症、蜂巣炎

まれに、ショックまたはアナフィラキシー様症状（血管浮腫・じんましん・呼吸困難など）があらわれることがあります。

◇他の予防接種との間隔

子宮頸がんの予防接種前に生ワクチンを接種した場合は、原則として接種した日から27日以上、不活化ワクチンを接種した場合は原則として、接種した日から6日以上の間隔が必要です。
子宮頸がん予防ワクチン接種後、他のワクチンを接種する場合は6日以上の間隔が必要です

予防接種に行く前のチェック

- 1 お子さんの体調はよいですか？
<下記に該当する場合は予防接種を受けることができません>
 - ①明らかに発熱（通常 37.5℃以上をいいます）している時
 - ②重篤な急性疾患にかかっていることが明らかなお子さん
 - ③その日に受ける予防接種の接種液に含まれる成分でアナフィラキシーを起こしたことがあることが明らかなお子さん
- 2 受ける予防接種について、必要性、効果および副反応など理解していますか？
- 3 母子健康手帳は持ちましたか？
- 4 予診票の記入はすみましたか？

